

カジュアルスタイルにおける方言切換え

—— 形式の受容と切換えの要因 ——

船 木 礼 子 (橋本礼子)

1. 目的

移住者が移住先の方言を受容・習得する際、特定の言語項目だけ切換えミスが多くなるなど、言語変項によって切換えの難易度、あるいは切り換えるべき項目としての認識の度合いなどにちがいがあることが考えられる。そこには、モニターのかけやすさや、語形の類似度、あるいはその語形を使用することに対する抵抗感といった意識の問題も絡むだろう。また、場面や話題などによる注意度の変化も関与すると思われる。

具体的な方言切換えデータから言語(方言)間切換えやスタイル間切換えにおける切替のメカニズムを探る研究は少なくない。そこでは切換えの年齢差、場面差(カジュアル／フォーマル)、地域差などが明らかになっている。こうした研究の成果を応用しつつ、本研究では会話参加者の年齢とスタイル(カジュアルスタイル)を固定し、変数を相手の方言に特化して、そこで実際に使われた言語形式から、どの言語変項でどのような切換えが起こっているかを分析する。そこから、移住先の方言を受容・習得し使いこなすに当たって、言語変項による切換えの難易度、あるいは切り換えるべき項目としての認識の度合いなどにちがいがあのかを確認していく。

2. 使用するデータ

本稿では、筆者が1998年に録音した親しい友人同士の電話での談話を文字化し、資料として用いる。山口県から京都市に移住して当時6年目の話者Aが分析対象者であり、会話の相手としてAと親しい友人関係にある同年齢の人物BとCを選び、それぞれ一対一で会話するようにセッティングした。話者BはAと同郷、話者Cは近畿生え抜きである。このデータから、話者Aが話し相手B・Cの使用言語(方言)にあわせて、どの言語変項を切換え、どういった時に切換えに失敗し、どの言語変項を切り換えないかを見る。

- ・談話資料「友人1」「友人2」

1998年に電話での会話を録音したデータを、筆者が文字化したもの

- ・録音時期：1998年8月

- ・録音場面：Aと友人B、Aと友人Cの、電話での会話
- ・録音機材：Aの自宅の電話の録音機能（マイクロテープ）
- ・録音時間：約15分（マイクロテープによる制限）

電話開始から5分後に録音を開始（定型的な挨拶などが済んだ後の自由な会話を録音するため）

・話者情報

「友人1」

A：録音時25歳 女性

山口県熊毛郡田布施町出身、19歳から京都在住。録音当時は大学院生。

B：録音時25歳 男性

山口県柳井市出身、19～22歳の間は東京に居住（就学）、大学卒業後は柳井市在住。

Aとは高校時代の同級生で、同じクラブに所属していた。

「友人2」

A：録音時25歳 女性（「友人1」と同）

C：録音時25歳 女性

兵庫県伊丹市出身。19～22歳の間は京都、23歳から草津市に居住するが、伊丹市との間を頻繁に行き来する。録音当時は大学院生。Aとは学部同期生で、2年間同じクラブに所属していた。

参考資料として、文字化した両談話の冒頭部分50発話目までを稿末に添付する。以下、本文中に示す談話例は、談話の種類（友人1・友人2）、発話番号、話者（A・B・C）：発話内容の順に表示し、（ ）に全国共通語相当の訳、[]は筆者による注記を書いている。また、*は発話の重なり等で聞き取れない部分（1拍相当）である。なお、話題となっている人物の名前はすべて伏せ、出現順にDからアルファベットを当てて示す。

3．分析結果

3.1. アクセント・イントネーション

アクセントやイントネーションに関して、この2つの談話データを筆者の聴覚印象で判断すると、次のことが観察された。

まず「友人1」談話では、AはBに対して山口方言のアクセント体系・イントネーションパターンを使用している。山口方言は東京式アクセントだが、東京方言とはアクセントが異なる語彙があり、このことをBが話題にしている数例（山口では「真っ茶」や「真っ赤」はHL、「抹茶」はLHだが、東京ではどれもLHとなること）は東京方言のアクセントが出てくるが、それ以外はすべて山口方言として通用しているアクセントだといえる。

「友人2」談話では、Aは近畿のアクセントをほとんど使っていない。ただし、近畿地方に来てから出来たCとの共通の友だちの名前のうち、東京式アクセントで平板、京阪式で高起無核のもの（例えば「橋本」）につける敬称「クン」は必ずしよになっている。これは、固有名詞とセットで親しみのある呼び名として習得し、使用しているのであろう。

また、直前のCの発話を繰り返す場合や、近畿方言話者の台詞の引用やまねの場合には、山口のものでも全国共通語のものでもない、近畿方言あるいは近畿方言的なアクセントやイントネーションが観察される。さらに、興が乗って、いわゆる「ツッコミ」のような発話を笑いながら行うときにも山口方言にはないアクセントが見られた。

- (1) 直前発話の繰り返し（友人2談話）

181C: 〈略〉^{L H L H H H L L L L H H}スゴクカッコワルイヤロナー(すごく格好悪いだろうな)

182A: ^H ^H ^H ^L ^L ^L ^L ^L ^H ^H
 カッコワルイヤローナー (格好悪いだろうな)

- (2) 近畿方言話者の台詞の引用やまね(友人2談話)

332A: ^{L H H H H L} トリアエズ ^{L L L L H H H H H H H H H H H H H H H H L} Okunoren Rakusaki O Oshiete Kurema Senka ^{L H H} ーテ、^{L H H} オーサ、
^{L H H} アノー、** (とりあえず「Oくんの連絡先を教えてくださいませんか？」って、
オオサ「大阪のいいいさし」あの、**)

- (3) 笑いながらの「ツッコミ」発話(友人2談話)

227 C : 〈略〉ナンデオレガコンナコトセナアカンネングジグジグジグジートカッ
 テマタデンワカカッテキター↓(「なんで俺がこんなことしなければなら
 ないんだ、グジグジグジグジー」とまた電話がかかってきて)

228 A: 「笑いながら」ソリャ^L〇^Hオコ^Lルワ^Lー、*** (そりゃ〇怒るよ、***)

実際には、「ツッコミ」はツッコミをするような人物の台詞をまねながら発話していると考えられるので、「近畿方言話者の台詞の引用やまね」と同じタイプのものである。ただし、③の「ツッコミ」の「オコル」は高起無核（HHH）になっておらず、Aが動詞のアクセントパターンとしてHHHやLLHを習得しつつも語彙と対応していない状況が見て取れる。

なお、直前発話の繰り返しや台詞の引用・まねの場合に必ずアクセントやイントネーションが近畿方言あるいは近畿方言的になるわけではない。特に(4)のように語彙は近畿独特のものであるにもかかわらずアクセントが再現できていないこともある。

- (4) 直前発話の繰り返し(友人2談話)

453C: ^{H H H L L H H L L}カナンヤローモー（かなわないだろ、もう）

454 A: カナ^Lン^Hワ^Hー^L〔笑〕カナ^Lン^Hワ^Hー^L（かな^Lわ^Hない^Hや〔笑〕かな^Lわ^Hない^Hや）

- (5) 近畿方言話者の台詞のまね（友人2談話）

342 A : ワカリマセンッテユワレソージャ**** (「わかりません」って言われそう)

ジャ****)

これらの例から、Aは近畿方言のアクセントやイントネーションを部分的に知りつつも、まだ語彙と完全に対応しておらず、この段階では直前発話の繰り返しというシャドーイングの状態や、Aの頭の中にある関西人的な台詞を再現した時だけという、かなり限られた場合にしか近畿方言のアクセントやイントネーションを使用できない状態であったといえる。

3.2. 原因理由の接続助詞

山口方言では原因理由の接続助詞にケーを使用する。動詞・形容詞・助動詞には終止形に、形容動詞ではジャ終止形またはナ終止形に、名詞には断定形式ジャを介して接続する。一方、近畿方言では使用形式が多く複雑である。Cの近畿方言ではカラとシを併用しているが、割合としては動詞・形容詞・助動詞に付く場合はカラとシが使われるけれども、形容動詞や名詞に付く場合はヤを介したヤカラの形が多い。なお、Cは接続詞の場合はヤカラよりもダカラやダカを多く使っている。

表1をみると、Aは話し相手が山口方言話者が近畿方言話者かによって、原因理由の接続助詞をカテゴリカルに使い分けていることがわかる。

表 1

	友人 1 (山口)		友人 2 (近畿)	
	A	B	A	C
-ケー	5	35	0	0
-カラ				
(動詞・形容詞) カラ	0	0	2	7
(名詞・形容動詞) ヤカラ	0	0	0	9
(名詞・形容動詞) ダカラ	0	0	1	0
-シ				
(動詞・形容詞) シ	0	0	6	5
(名詞) ヤシ	0	0	0	2
(名詞) ジャシ	0	0	1	0

Aは、B相手にはケーしか使用しない。Cに対しては複雑で、山口方言のケーは全く使わないのだが、前節要素が動詞・形容詞・助動詞の場合はカラとシを使うがシの使用が若干多く、また前節要素が名詞の場合はCの使うヤカラやヤシではなくダカラを選択している。つまり、Aは移住先の近畿方言話者に対しては、前節要素によって相手と同じ形式を使いこなせない場合があるといえる。

これはなぜか。まず母方言の形式をカテゴリカルに消せる理由としては、山口のケーが近畿方言の形式と大きく違っているために目立ちやすく、モニタリングしやすいことが挙

げられる。話者の意識としても、ケーは「きつい山口弁」と言われ、使わないように気をつけていたため、ケーという形式を使わないことに注意を払いやすかったと考えられる。また近畿方言の原因理由表現としてのシは、並立のシと同形であり、意味派生関係が理解しやすく、特に移住先の京都ではシが優勢であったために、受け入れやすかった可能性がある。

その一方でヤカラやヤシを使用しない理由の一つとして、近畿の断定形式ヤに対する抵抗感が挙げられる。話者Aは当時、近畿方言をそのまま使えるようになることを避けていた。これには他地方出身者が近畿方言を下手に使うことへの近畿方言話者の不寛容が関わっていただろう。Aは近畿方言の代表格である「ヤ」を避け、代わりに標準語形でもあり、接続詞であればCも多用するダカラを選択したのではないが。

なお、AはC相手にジャシを一回使っている。これは「ヤ」を避けるあまりに、山口方言の「ジャ」と近畿方言の「シ」が混ざってしまったミスティク⁽²⁾であろう。

(6) (友人2談話)

260 A: オトナシーコジャシナー (おとなしい娘だからねえ)

3.3. 断定の形式

前節では断定の形式について、Aが意識的に近畿方言の形式を避けた可能性を指摘したが、同時に「ジャシ」のようなミスティクがあったように切り換えにくいものであることも窺える。では断定形式の使用状況はどうか。名詞（および準体助詞）の文・形容動詞文の文末における断定形式の使用状況を表2にまとめる（次頁）。

文末で使用する断定形式の共起制限や用法は山口方言と近畿方言との間で大きく異なるので、表2では名詞（および準体助詞）の文・形容動詞文での断定形式や終助詞の共起制限から、次のように整理している。

【終助詞Ⅰ群】モン、近畿のナ、山口のネなど。両方言で断定形式の共起が必須。

【終助詞Ⅱ群】カ、ヨ、山口のカネ（イネ、イヤも）。両方言で断定形式が共起しない。

ただし近畿では情報提供の文（ヨ相当）の場合、「準体助詞＋断定形式＋ヨ」も「準体助詞＋ヨ」も使われない（準体機能と断定機能が融合した形式（ヤ）ネン、（ヤッ）テンを使用）。山口では相づちとして平叙文の「ソーカネ」が多用される他、情報提供の文の場合に準体助詞にヨが直接する。

【終助詞デ】近畿では断定形式必須、山口では断定形式不可（ただし若年層はデ不使用）

【終助詞ワ】近畿では断定形式必須、山口では名詞文・形容動詞文ではワ不使用

Aはかなりジャとヤの切換えができていますが、2点注目すべき箇所がある。一つは「断定形式＋ ϕ 」、もう一つは断定形式なしの「準体助詞＋ ϕ ＋ ϕ 」である。

山口方言では、名詞や準体助詞にジャが後接してジャの後に何も付かない「ジャ+ ϕ 」は、話し手が発見や納得を表出する表現となる。Aは友人2談話でも「ヤ+ ϕ 」を発見や納得を表す1例にしか使っておらず、これは対応置換だと考えられる。

(7) (友人2談話)

396 A : ソブラノデモナイワアルトヤ ([自分の発言の間違いに気づいて] ソブラノでもないや、アルトだ)

表 2

	友人 1 (山口)		友人 2 (近畿)	
	A	B	A	C
ジャ				
(ン) ジャ+助動詞タ	3	3	0	0
ジャ+ ϕ	4	2	1	0
ジャ+終助詞Ⅰ群	3	4	1	0
ジャ+終助詞デ	0	0	0	0
ジャ+終助詞ワ	0	0	0	0
ヤ				
(ン) ヤ+助動詞タ	0	0	3	6 ※ ¹
ヤ+ ϕ	1	0	1	7
ヤ+終助詞Ⅰ群	0	0	3(ネ) 1(ナ)	13(ナ)
ヤ+終助詞デ	0	0	1	3
ヤ+終助詞ワ	0	0	1	2
ダ				
ヤ+終助詞Ⅰ群	0	0	1	1
ナ (形容動詞、ミタイなど)				
ナ+ ϕ	1	0	0	0
断定形式なし				
準体助詞+ ϕ + ϕ (終助詞なし)	4	2	5	4 ※ ²
準体助詞+ ϕ +終助詞Ⅱ群	7	16	2	0
指示詞+ ϕ +終助詞 (ネ・ヨネ)	0	0	2	0

※¹ うち4例は「-ヤッテン」。

※² 4例のうち3例は動詞連用形接続のテン。1例は「シタンヤ」か「シテン」のほうが自然に感じられる、以下のような例である。早口で不十分に発音されたものか。

(友人2談話)

141 C : ハッキョーシタンンキョネントカワー ([姪が豆腐を箸でつまめずに] 発狂したのだ、去年とかは)

(7)

ただし、Bに対して「ピッタリヤー(ぴったりだ!)」、Cに対して「ユッテナサソー ज्याー(言ってなさそうだ、もう)」など、1~2例相手の使用しない形式を使っているところがあり、話し手が自分の発見を表出するこの項目が切換えにくいものであることを示唆している。

また、友人2談話でAが準体助詞で文が終止する「準体助詞+ ϕ + ϕ 」を使うのは、(8)の「ソーナン(そうなの)」など、相手からの情報を受け入れていることを相づち的に示す山口方言で多用される表現である。近畿方言では、疑問文であれば準体助詞の後の断定形式が省略されてもおかしくないが、平叙文で相づち的なものとしては不自然である(「ソーナンヤ」のように断定形式があれば自然で、Cにも1例ある)。そのためか、(9)では相づちのつもりで「ソーナン」を発話したAに対して、Cは肯定を表明するための「ソー」や「ウン」を必ず発話している。

(8)(友人1談話)

49 B: デライシューワナー↓、ライシューノドヨーピワアノーオー、ナンジャツタツケ、アンサンアンサンプルジャネーヤ、エトマーチングコンテストガヒカリデアルンヨー↓(そして来週はね、来週の土曜日はあのオー、なんだったつけ、アンサン、アンサンプルじゃないや、ええとマーチング・コンテストが光市であるんだよ)

50 A: アソーナン(アア、そうなの)

51 B: デヒョットシテ(それでひょっとして)

(9)(友人2談話)

193 C: ソー、**Oモツカグチニオルシナー↓、カノジョガ、(ソー、**Oも塚口にいるしね、彼女が)

194 A: アッソーナン↓(アッそうなの)

195 C: ソーOケータイヤメテン、デレンラクツカクナッテン(ソーOは携帯電話をやめたの、それで連絡つかなくなったんだ)

196 A: ソー(ソー)

197 C: ナンOナー、カラダコワシテコッチカエッテキテテナー、リョーヨーチューヤッテン(ナンOはね、体こわしてこっちに帰ってきててね、療養中だったんだ)

198 A: アソーナン(アそうなの)

199 C: ウン(ウン)

こうした事例から、断定形式の文末用法の複雑さが切換え難さに関わっているといえるだろう。

3.4. 推量・確認要求の形式

推量表現の場合、断定形式のジャ／ヤと平行して、ジャロー／ヤロという単純な形式の対応がある。Aは友人1談話ではジャロー専用だが、友人2談話ではジャローとヤロを併用している。

表3-1 推量

	友人1（山口）		友人2（近畿）	
	A	B	A	C
ジャロー	4	8	4	0
ヤロ	0	0	6	3

除外：山口の打消推量のマーは友人1談話のBに1例使用があったが、Aおよび友人2談話のCに打消推量を使用する文脈がなかったため省略
ダローはどの話者も不使用

しかし確認要求の表現をみると、用例が少ないながらも、Aは相手が使用する形式のみを使うというカテゴリカルな切換えをしていることがわかる。

表3-2 確認要求

	友人1（山口）		友人2（近畿）	
	A	B	A	C
ジャロー	1	3	0	0
ジャー	1	1	0	0
ヤロ	0	0	1	5
ヤン・ヤンカ・ヤンナ	0	0	2	15

除外：ジャンナイカ1例（友人1談話のBのみ） マセン（他人の発話の引用）
マー、ダロー（どの話者も不使用）

推量ではなぜ相手の使用形式に合わせないことがあるのか、確認要求ではなぜ完全に相手の使用形式に合わせるのか。これには、ジャローやヤロなどの推量表現形式があくまで話し手自信の推量判断を表出するものであって、聞き手の存在を問題にせず、独り言としても使えるのに対して、ジャローやヤロが確認要求として用いられる場合やジャー、ヤン・ヤンカ・ヤンナといった確認要求の文末詞類は、必ず相手に働きかけ、相手に伝わって理解されなければならないことが深く関わっている。このためカジュアルスタイルでは、推量であれば母方言の形式を独り言のようにもらすことを強く制限する必要がないが、確認要求では相手の使用する形式にできる限り歩み寄るのだと考えられる。

3.5. 否定の形式

動詞に付く否定形式は、山口はン、近畿はヘン（ヒン）・ン・ナイという1：3対応で、近畿方言においてンとヘンをどのように使い分けるのか、またカジュアルな談話にみられ

(9)

るナイがどういったときに使われるのかといった点は複雑である。AはBにはン専用だが、Cにはンとヘンではなく、ンとナイを使用している。

表 4

	友人 1 (山口)		友人 2 (近畿)	
	A	B	A	C
ン	11	16	9	6
ヘン	0	0	0	9
ナイ	0	0	8	3

ン：ンク(-テ、-ナル) ンカッ(-タ、-タラ)も含む

ナイ：ナク(-テ) ナカッ(-タ、-タラ)も含む

除外：カモシレン(今回の話者は山口も近畿も「カモシレン」のみ使用)

義務表現形式(山口-ンチャイケン、近畿-ナアカン。友人2 談話でAの確実な使用例がないため比較できない)

マセン(他人の発話の直接引用としての用例のみ)

アカン、カナーン(近畿方言の固定的形式。ヘンに互換不可能)

この結果から、Aは両方言に共通しているンはどちらのスタイルでも使い、またこれと併用する形式としては、近畿方言形ヘンではなく、近畿の若年層が日常会話でも使うようになっている標準語形式ナイを選択していると考えられる。集計からは除外したが、Aは「アカン」などの近畿方言の代表格の形式も全く使わない。こうしたことから、AがCと話すスタイルとして意識的に近畿方言独自の形式を選んでいる可能性が指摘できる。

3.6. アスペクトの形式

アスペクト形式は、山口方言ではヨル／チョルの2項対立があり、部分的にはチョルの拡大(チョルへの一歩化)が見られるものの、不完了的把握にはヨル形、完了的把握にはチョル形がほぼ使い分けられる。一方の近畿方言ではアスペクト対立が曖昧になり、ヨルが軽卑語化して若年層にはあまり使われなくなったほか、トルは過去形の「-トッタ」および「-トッテン」以外で使われることが少なくなってきた。表5の友人2 談話のCを見ると、用例が少ないながらも、トル形は過去形でしか出現しない。

(10) (友人2 談話)

89C：ンー、デモドラエモンノハシオフタツカッタゲトッテンヤンカー(んー、でもドラえもんの箸を二つ買ってあげていたのだよ)

Aは友人2 談話において、相手の使用形式に歩み寄ってはいるのだが、母方言のヨル形をテル形に、チョル形をトル形に対応置換しているようである。このため、Cが使用しないトル形の非過去形「-トル」も2例使っている。

(11) (友人2 談話)

18A：ウン、[笑→]チツチャイノッテユートル(うん、小さいのって言っている)

(12) (友人2 談話)

244 A : Oハタライトルン (O [人物名] 働いているの?)

表 5

	友人 1 (山口)		友人 2 (近畿)	
	A	B	A	C
ヨル形	13	14	0	0
チョル形	24	13	0	0
トル形				
非過去 -トル	0	0	2	0
過去 -トッタ	0	0	1	2 ※ ¹
テル形				
非過去 -テル、-テテ、-テイ	1	0	13	22
過去 -テタ	0	0	3	9
テイル形	0	0	1 ※ ²	0

※¹ このうち 1 例は -トッテン の形 (のだ文) をとるもの。※² 以下に示すように言い間違いの直後に言い直した、不自然な発話である。友人 2 338 A : デモイエニレンラクサキオシテテ、オシエテイルジャローカアノヒト
ワ (でも家に連絡先をオシテテ、教えているだろうが、あの人は)

このように、C が過去形「-トッタ」「-トッテン」でしかトル形を使わないのに対し、A は非過去形・過去形どちらにもトル形 (-トル・-トッタ) を使っている点で、アスペクト項目については近畿方言の複雑なルールを習得できておらず、母方言のルールから形式を単純に置き換える切換えで止まっているといえる。

3.7. 音便

近畿以西の方言ではウ音便が広くア・ワ行五段活用動詞に見られるが、若年層では標準語化の影響か、日常会話では非音便形がよく聞かれる。ただし、ウ音便使用の頻度には地域的な偏りがある可能性もある。表 6 を見ると、動詞については近畿よりも山口のほうがウ音便を多用する傾向があるが、近畿でも頻度は低いが使わないわけではない。これに対して形容詞 (および形容詞型の活用をする語) の場合、山口ではウ音便を多用するが、近畿方言話者の C はウ音便形を使っていない。

表 6

		友人 1 (山口)		友人 2 (近畿)	
		A	B	A	C
動詞	ウ音便	2	5	2	2
	促音便	8	6	9	22
形容詞※	ウ音便	4	8	0	0
	非音便 (ク)	3	1	5	4

※ 形容詞には形容詞および形容詞型の活用をするラシイを含む

こうした各方言の音便形の使用状況に対し、Aは動詞の場合はウ音便を使用し、形容詞の場合はウ音便を使用しないという、会話の相手の使用状態を品詞別に感知したきめ細かな切換えを行っていることがわかる。

4. まとめ

話者Aの切換えについて以下の点が明らかになった。

まずアクセントやイントネーションは、直前の発話の繰り返しや近畿方言話者の台詞の引用などといった場合には、近畿方言のアクセントやイントネーションや、正確ではないが近畿方言的なものを使うことが観察されたが、カテゴリカルに切り換える段階には至っていないと考えられる。

相手によって使用形式をカテゴリカルに切り換える場合でも、品詞ごとに使用形式を分類していることがある（原因理由の接続助詞、音便）。また、代表的な近畿方言形式を忌避する傾向がある（原因理由の接続助詞「ヤカラ」の不使用、否定形式）。

ほぼ相手の使用形式に合わせて切換えている場合も、方言間で共起制限や用法が異なる場合は対応置換が行われ、近畿では使われない組み合わせの形式が使用されることがある（断定形式、アスペクト形式）。

方言間の用法がほぼ同じで形式の対応が単純な場合は対応置換が行われるが、その際、聞き手の存在が関与しない表現（推量）には母方言形式が使われることが少なくない。逆に聞き手に働きかける表現（確認要求）には、相手の使用する形式に完全に切り換える（推量・確認要求の形式）。

なお、話者Aはその後の生活の変化とそれに伴う意識の変化によって、現在、家族に対する最も親しいスタイルとして近畿方言的な形式を多用するようになっている。このため、方言切換えのしかたもかなり変化していると思われる。こうした、個人の中でのスタイルの位置付けが変化したことによる、個人の切換え能力・切換え状況の経年的な変化も、今後の課題として注目される。

【注】

- (1) 話者Aは船木礼子（橋本礼子）自身である。普通、録音の対象者は分析者自身ではない方がよい。しかしこの録音が今から12年ほど前のものであって、当時の私自身のことばづかいを現在の目から客観的にみることができるため、今回の分析に使用することに耐えると判断した。またこの録音テープは別の分析（会話において積極的でない話し手はどのような言語行動をするか、聞き手としてどのような働きをするか）を目的として録音されたにもかかわらず、その目的を果たすには不備があったために放置されていたものであり、もしもAが録音中に自分のことばづかいを制御することがあっ

たとしても、今回の分析項目には大きく影響しないと考えられる。

- (2) ちなみに、アクセントや文末イントネーションも山口方言と関西方言とが混ざった不自然なものとなっている。

(6') 260A: オトナシー^{L H H H L H L}コジャシナー^{L H H}

- (3) 山口方言の文末に使用される「ジャー」は確認要求的表現に用いられ、「イクジャロージャー（行くだろうよねえ）」のように推量表現にも後接する。（船木2001）

【付記】

本稿は、変異理論研究会（2008年12月13日、於関西大学千里山キャンパス）および日本方言研究会第88回研究発表会（2009年5月29日発表原稿集上に発表、2009年10月30日島根県立産業交流会館にて口頭発表）での発表内容を改稿、修正したものである。口頭発表の場にて有益なコメントをくださった佐藤亮一先生、小林隆先生、沖裕子先生、小西いずみ先生に感謝申し上げます。

なお本稿は、科学研究費補助金の若手研究(B)「方言文法の視点による推量表現の変化に関する研究」（課題番号：20720126、研究代表者：橋本礼子（船木礼子））、および基盤研究(B)「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」（課題番号：21320086、研究代表者：日高水穂）の研究の一部である。

【参考文献】

- 朝日祥之（2008）『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房
 阿部貴人（2006）「スタイル切換えと切換え能力の発達 青森県弘前市方言話者の目的表現を例に」『阪大日本語研究』18（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座）
 高木千恵（2004）「若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ」『日本語科学』16
 （2006）「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊2（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座）
 中井幸比古（2002）『京都府方言辞典』和泉書院
 平山輝男編・郡史郎他著（1997）『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』明治書院
 船木礼子（2001）「山口方言の文末に見られるジャについて 断定辞のジャと文末詞のジャ」『阪大社会言語学研究ノート』3（大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室）
 ロング・ダニエル（1990）「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語学』162

ふなき れいこ（はしもとれいこ） 神戸女子大学准教授

【資料】

〈文字化凡例〉

○表記について

- ・二行を一組とし、上段は発話を文字化したもの、下段は発話内容の共通語訳とする。
(発話番号)(発話者略号):(発話)
(発話番号)(発話者略号):(共通語訳)
- ・共通語訳の中では、言いよどみや言いさし、発音の不明瞭な場合などはカタカナでそのまま記す。また、あいづちなどは訳さずに発音と同じものをカタカナで記す。
- ・発話の重なりは考慮せず、文節単位で区切って改行する。また、あいづちも一発話とみなして改行する。なお、あいづちの位置が語中となる場合は、あいづちがなされた(重なった)語の直後の文節を改行し、その前に記すこととする。あいづちに続けて発話がなされる場合は、あいづち行の続きに記録する。
- ・文末のイントネーションが上がる場合は「↑」を付ける。また、文末のイントネーションが下がる場合および上がりも下がりもしない場合は、適宜「↓」、「→」によって示す。なお、共通語訳の中ではイントネーションにかかわらず、文末の疑問表現には「？」を付ける。
- ・発話中のポーズは、聞きおこし作業者の判断で句読点によって示す。基本的に、読点は一人の話者の発話における3秒未満のポーズを示す記号として使用し、句点は一人の話者の発話における3秒以上5秒未満のポーズを示す記号として使用する。また、発話が終了し話者が交替するまでに3秒以上5秒未満のポーズがある場合に限り、ポーズをはさんでターンが交替していても、句点をポーズを示す記号として使用する。
- ・発話中に5秒以上のポーズがある場合は、[5]のように[]内にポーズの秒数を示す。
- ・共通語訳中の句読点は、ポーズだけでなく意味の区切れにも任意に付けている。

○音声・音韻について

- ・音韻体系は共通語とほぼ同じである。
- ・長音は「ー」、このうち長いものは「ーー」のように記す。
- ・フィラーやあいづちは、できるだけ聞こえたとおりにカナに置き換える。

○その他

- ・聴解不可能な部分は*で示す。*はおよそ1モーラに相当するものとする。
- ・作業者による注を文字化資料中あるいは共通語訳中に記す場合は、すべて[]でくって示した。ただしその位置は文節単位で指定している。
- ・地名は伏せないが、個人名は話題にのぼった順にD、E、Fのように伏せている。なお、個人名に付された敬称などは「A先生」「Aさん」「Aちゃん」のように示す。
- ・笑い声や咳などは、該当箇所に[笑] [咳] ため息 などと記す。また笑いながらの発話

には笑い始める部分に「笑→」と記すが、笑い終わりの位置は示していない。なお、これらの記号の位置を文節単位で指定しているため、実際は語中に行われているものもある。

- アクセントは文字化していない。

〈友人 1 談話〉

1 B : アノー、イチジタイツチューカンジー↑ジャケー、ジッサイニ

1 B : あの、[イチジタイは不明]という感じだから、実際に

2 A : フーン

2 A : フーン

3 B : ウン、ゼンタイナカデワネ

3 B : ウン、[コンクールに参加した団体の]全体の中ではね

4 A : ウン

4 A : ウン

5 B : マズマズノ、トコロニイチョットタンジャケドネ

5 B : [順位は]まずまずのところにいたのだけどね

6 A : エー――

6 A : エー

7 B : マーヨーアンナイーカゲンナレンシューデアンナ

7 B : まあ、よくあんないい加減な練習であんな

8 A : [笑]

8 A : [笑]

9 B : [笑]

9 B : [笑]

10 A : [笑]ヤーデモードヨ、マイシュードヨービー、トー↑、**

10 A : [笑]いや、でもドヨ、毎週土曜日、と、

11 B : ソーソー

11 B : そうそう

12 A : カヨー、

12 A : 火曜、

13 B : ンー

13 B : ンー

14 A : *****

14 A : *****

(15)

15 B : エッ、アノーホトンドネー、

15 B : エッ、あのほとんどね、

16 A : ウン

16 A : ウン

17 B : [言いよどみ] シューカングライズーットヤッタンジャケドネー

17 B : [言いよどみ] 週間ぐらいずっと [練習を] やったのだけどね

18 A : ウン

18 A : ウン

19 B : マソーワユーテモアノ、ヨイヨチョコゼンデナイトカエレンノモオルシネ

19 B : まあそうはいつでもあの、本当に直前でないと帰られない人もいるしね

20 A : ソージャーネーダイガクノトカ、

20 A : そうだね大学に通っている人とか、

21 B : ホーナンヨネー ↓

21 B : そうなんだよね

22 A : ウン、ホトンドヨタデ、レンシューー、

22 A : ウン、ほとんど余田 [地名] で、練習 ?

23 B : ソーソーソーソー、ヨタカネー、アト

23 B : そうそうそうそう、余田か、あと

24 A : ウン

24 A : ウン

25 B : アノーブンカフクシカイカンノヨコニネ

25 B : アノー、文化福祉会館の横にね

26 A : ウン

26 A : ウン

27 B : ギョーセーションホームutte ユノガチョ、ソコニオンガクシツガアルンヨー

27 B : 行政少年ホームっていうのがチョ、そこに音楽室があるんだよ

28 A : フーン

28 A : フーン

29 B : チョットシタボーオンシセツノ、ソコデ

29 B : ちょっとした防音施設の [ある] そこで

30 A : ウンウン

30 A : ウンウン

31 B : ヤリヨッタンジャケドネー

31 B : [練習を] やっていたのだけどね

32A : ウンウン

32A : ウンウン

33B : ウン、ソレデモカリレントキヤーアノ、ショーガッコーノタイークカントコカリヨッタ

33B : ウン、それでも借りられない時はアノ、小学校の体育館のところを借りていた

34A : [笑]

34A : [笑]

35B : ヤッパリネ、マイニチッテユートネ

35B : やっぱりね、毎日というとな

36A : ウン

36A : ウン

37B : チョットー、ムズカシ

37B : ちょっと難しい

38A : チョッキツ***ヨネ

38A : ちょっときつい***よね

39B : キツカッタリスルケーネ、ウン

39B : きつかったりもするからね、うん

40A : フーン

40A : フーン

41B : イマキューシチューナンヨ、[笑→]ホイジャケ、ホッカ

41B : 今休止中なんだよ、[笑いながら]だから、ホッカ

42A : [笑→]オツカレサンジョータイ↑

42A : [笑いながら]お疲れ様状態？

43B : ウーン、マーネ

43B : ウーン、まあね

44A : ウン

44A : ウン

45B : センシューーコンシューワジャケモボンデネ

45B : 先週、今週は、だからもう盆だからね

46A : ウン

46A : ウン

47B : モヤスモートモッテヤスンジョッター↓

47B : もう休もうと思って休んでいて

(17)

48A : ウーン

48A : ウーン

49B : デライシューワネー↓、ライシューノドヨーピワアノーオー、ナンジャツタツケ、
アンサンアンサンブルジャネーヤ、エトマーチングコンテストガヒカリデアルン
ヨー↓

49B : そして来週はね、来週の土曜日はあのオー、なんだったっけ、アンサン、アンサン
ブルじゃないや、ええとマーチング・コンテストが光市であるんだよ

50A : アソーナン

50A : アア、そうなの

(以下略)

〈友人2談話〉

1 C : ウダウダウダウダシテルダケヤカラ

1 C : ウダウダウダウダしてるだけだから

2 A : ウン

2 A : ウン

3 C : ウン

3 C : ウン

4 A : ***ゲンキ↑

4 A : ***元気?

5 C : ウンゲンキゲンキ、

5 C : ウン、元気、元気、

6 A : アイカワラズ、チツチャイ

6 A : 相変わらず、小さい?

7 C : チツチャイチツチャイ

7 C : 小さい、小さい

8 A : [笑→]チツチャイ

8 A : [笑いながら]小さい

9 C : [笑→]ユートッタロ、*****、チョットマッテテAチャン、ユツテクルイマカラ
[笑]

9 C : [笑いながら]言っておいてやる、*****、ちょっと待っててAちゃん、言ってく
る、今から[笑]

10A : イヤー、[笑→]ナンカ、オコ**、オコラレル[笑] オカーサンニ、オコラレル

10A : イヤー、[笑いながら]何か、オコ**、怒られるよ[笑] お母さんに、怒られる

- 11C : ソーヤデーオカーサンニオコラレンデー、マー***
 11C : そうだよ、お母さんに怒られるよ、マー***
 12A : ***ゲンキ↑
 12A : ***元気？
 13C : エ↑
 13C : エ？
 14A : ゲンキナラゲンキ****、
 14A : 元気なら元気****、
 15C : ナニガアタシ↑
 15C : 何が、私？
 16A : イヤイヤ、チ、Dサン
 16A : いやいや、チ、Dさん
 17C : ア、チッチャイノー↑、
 17C : ア、小さいの？
 18A : ウン、[笑→] チッチャイノッテユートル
 18A : ウン、[笑→] 小さいのって言ってる
 19C : ウーン、チッチャイノゲンキ[笑] ヤワタシランナカデワチッチャイノヤカラナ[笑]
 19C : ウーン、小さいのは元気。[笑] ヤ、私たちの中では「小さいの」だからね[笑]
 20A : スキーライナーゼンゼンアッテナイシネー
 20A : スキー以来ね、全然会ってないしね
 21C : アーソーカー、ソーヤナー
 21C : アーそうか、そうだね
 22A : ハナシワイロイロキートッタケド
 22A : 話はいろいろ聞いていたけど
 23C : Aチャンヤマオクニコモッテルモンヤカラ
 23C : Aちゃん、山奥に隠ってるもんだから
 24A : ウー[笑]
 24A : ウー[笑]
 25C : モットマチニコナ[笑]
 25C : もっと街に来ないと[笑]
 26A : [笑→] マチニ**、ホンマネー
 26A : [笑いながら] 街に**、ホンマネー
 27C : ウン
 27C : ウン

(19)

28A : マチニデテナイワー

28A : 街に出てないなあ

29C : *ヤンナー

29C : *でしょ

30A : タマニデルトナンカヨウジオスル、

30A : たまに出ると何か用事をスル[言いさし]

31C : ウーン

31C : ウーン

32A : デタツイデニッテッテワーツスマシテ

32A : 出たついでにって言ってワーツと済まして

33C : ヤゲンキワゲンキヤケドナー

33C : ヤ元気は元気だけどね

34A : ウン

34A : ウン

35C : アノヒトイマコームインノシケンウケテンネヤンカー

35C : あの人、今、公務員の試験受けてるんだよ

36A : ウン

36A : ウン

37C : ダカコーアソビニーサソッテモイマイチコーヘンネンナ↑、ウーン

37C : だからこう遊びに誘ってもいまいち来ないんだよな、ウーン

38A : ****

38A : ****

39C : キブンテキニナ

39C : 気分的にね

40A : ウン

40A : ウン

41C : イコーヤイコーヤッテコーヘンノワカッテテチョットサソッテテンケド

41C : 「行こうよ行こうよ」って、来ないの分かっててちょっと誘ってたんだけど

42A : [笑]

42A : [笑]

43C : ダメナノッテ、ヤケー、キ、キキワケーワルイネットカッテイワレテ

43C : 「駄目なの」って、ヤケー、キ、「聞き分け悪いね」、とかって言われて

44A : ウン

44A : ウン

45 C : キキワルクワルクテモイモントカイツ[笑]

45 C : 「キキワルク[聞き分け] の言いまちがいか [聞き分けが] 悪くてもいいもん」と
か言ッ[笑]

46 A : [笑]**

46 A : [笑]**

47 C : ナンデソナオコチャマバージョンヤネン[笑]

47 C : 何でそんなおこちゃまバージョンなんだ[笑]

48 A : [笑]**

48 A : [笑]**

49 C : ダッテカワイーノ E チャンダケトカイツテコナイダ E ラー、キテタカラサー

49 C : 「だってかわいいの E ちゃんだけ」とか言って、この間 E たち、来てたからさ

50 A : ウン

50 A : ウン

(以下略)